



Title	関東地方における横穴式石室の先進と未熟
Author(s)	寺前, 直人
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 517-529
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関東地方における横穴式石室の先進と未熟

寺 前 直 人

はじめに

関東地方における横穴式石室の研究は、群馬県を中心とした尾崎喜佐雄による研究を嚆矢として調査と研究の厚い蓄積があり（尾崎 1966）、近年は小林孝秀、草野順平、青木弘、荒井啓太らによって統合的な研究成果が公表されている（小林 2014、草野 2016、青木 2024、荒井 2024）。一方、筆者は、これまで京都府南部や兵庫県南部の 6 世紀前半を中心とした横穴式石室の調査と報告に携わってきた。近年では静岡県や群馬県の横穴式石室を有する古墳の調査や成果報告に関わっている。

そこで、本稿では西日本とくに近畿地方中部における横穴式石室との比較を念頭に、関東地方の 6 世紀における横穴式石室の地域的特質、その独自の先進性と未成熟さを論じる。

1. 研 究 史

（1）日本列島における横穴式石室の導入と変遷

横穴式石室の日本列島における導入と普及については、古墳時代中期における九州島の先行と本州島における古墳時代後期の広域普及という視点で論じられてきた。また、東アジアにおける関係についても樋口隆康や白石太一郎、永島暉臣慎、小田富士夫らによって論じられてきた（樋口 1955、白石 1965、永島 1979、小田 1980）。墓制の系譜については和田晴吾の議論も重要である。和田は日本列島、中国大陸、朝鮮半島の棺制を比較し、東アジア世界での「開かれた棺」と「閉じられた棺」の系譜を整理した（和田 2007・2024）。そして、5 世紀の外交史にみられる中国南朝—百済—倭（畿内）の関係が、「閉じられた棺」を有する地域に一致し、一方で「開かれた棺」は北朝—（高句麗）—九州と広がるという展望を示した。畿内系の横穴式石室は古墳時代前・中期の槨の伝統を継承する「閉じられた棺」を志向するのに対して、九州系の石室では遺体が密封されず、「魄（遺体）が自在に浮遊できる死者の世界として機能したのであり、この空間を羨道部でのみ、主に板石によって閉塞された」と述べ（和田 2007:p. 21）、新羅や高句麗、中国北朝にみられる石棺床や屍床台と九州の横穴式石室にみられる蓋のない箱式石棺や仕切板で遺体安置場所を示す施設の類似性を強調したのである。

九州にみられる石室構造と畿内地域にみられるそれを区分する視点は古くよりあるが、明確な名称を与えた分類案としては、椋山林継の研究が古い。氏は横穴式石室の玄門構造に着目して、九州型と大和型の区分した（椋山 1983）。山崎信二は、近畿地方の横穴式石室には玄門石が内側への突出しないものが多いことに注目し、これらに畿内型横穴式石室という名称を与えた（山崎 1985）。森下浩行も、玄門形態と閉塞に基づき、内側に突出した玄門に板石を立てかけて閉塞とする九州型と、玄門は突出せず羨道にて石材を積み上げて閉塞する畿内型の違いを強調した（森下 1986 : pp. 2-3）。板石と塊石という閉塞に用いられた石材の違いが玄門形態を規定しているという森下の視点は重要である。土生田純之も畿内型石室を定義するさいには閉塞方法をその属性の一つとしている（土生田 1991・1994）。彼らに共通する九州系の簡易な閉塞と畿内系の念入りな閉塞の対比は、先に紹介した和田による「開かれた棺」志向と「閉じられた棺」志向と対応関係にあることはいうまでもない。

（2）東日本への横穴式石室の波及

東日本への横穴式石室の拡大については東海地方を対象とした鈴木一有の研究が参考になる。鈴木は東海地方にみられる横穴系墓制の多様性を整理したうえで（鈴木 2001・2007 ほか）、「埋葬施設の情報発信という側面に限れば、倭王権の統率力は限定的であったと評価せざるを得ない」と結論付けている（鈴木 2007 : p. 279）。ここで注意が必要なのは、鈴木は馬具や装飾大刀のありかたから当該地域と倭王権のつながり自体は弱くないことを議論の前提としている点である。また、かつて永島が議論したように（永島 1979）、情報伝達を漸進伝播や拠点伝播、着想伝播などに区分している点も興味深い（鈴木 2007 : pp. 277-278）。伝播形態の類型化としては太田宏明の取り組みも参考となる（太田 2007・2009）。

関東地方における横穴式石室の導入は、利根川上流に位置する関東北西部において古墳時代後期初頭、大阪府南部のいわゆる陶邑編年の MT（陶器山）15 型式期前後にみられる。これは畿内地域を含む西日本での横穴式石室の普及とほぼ同時期である。初現例の多くは、群馬県西部と埼玉県北西部、旧国名、郡名としては西毛地域や児玉郡、大里郡にみられる。関東北西部における初期横穴式石室の形状はおおまかに二系統に分かれる。前方後円墳には狭長な羨道を有する両袖式石室が採用される傾向があり、小古墳にはもっぱら無袖式石室が構築される。後者のなかには竪穴式石室の技術をもとに設置された横穴式石室もみられる（右島 2003）。

小林孝秀は朝鮮半島南部の石室に加えて北部九州から北陸地方の横穴式石室の構造比較と垂飾付耳飾などの半島系文物の分布の検討を通して、北陸から信濃をこえて上野に達する古墳時代後期前半の交流の存在を主張している（小林 2014）。さらに、この考古学的現象が、上野地域の対外交渉がヤマト王権主導のそれとは別にあったことの反映であると解釈した（同 : pp. 251-252）。先に紹介した東海地方における鈴木の見解をふまえて、それを政治的解釈に

昇華させた研究として重要である。

横穴式石室の広域普及に政治性を読み取る見解としては、近藤義郎の古墳時代論がある。氏は6世紀中葉以降における横穴式石室の全国的な普及状況について「大王から山間僻地や内海の小島に住む家父長に至るまで、同質の古墳構造をもつ」と評価したうえで、それを「大王に発する同族関係の擬制を通しての政治的かつイデオロギー支配」の反映であると解釈し、同質の墓制が「部族首長を通じてひろく部族成員に及んだ」と論じた（近藤 1983 : p. 355）。近藤のいう「同質」がどのレベルでの形態的、構造的な一致を意味しているのかを読み取ることは難しいが、横穴式墓制の普及を、大王を頂点とする擬制的同族関係の拡大とする解釈は、6世紀の王権と地域勢力との関係性に関する歴史像に今も有形無形の影響を与えている。つまり、「型式」の異なる横穴式石室であっても、横穴式石室あるいは横穴系の墓制をあらたに採用するという共通現象自体に倭王権による政治的・イデオロギー的支配拡大を読み取る余地も残されているのである。

（3）群馬県における横穴式石室の編年

右島和夫の研究が基準となる（右島 1994）。右島は尾崎の石室編年（尾崎 1966）の枠組みを継承しつつ、次の編年を構築した。まず、当地域の横穴式石室の変化を外部からの技術導入を契機に求め、4期に区分する。導入期については使用石材の大きさと空間構成という内的変化に基づき前後に細分した（右島 1994 : p. 142）。他地域からの専門的な技術の招来としては、第三段階（6世紀後半から末葉）の「加工石材の使用と石室の大型化」、第四段階（6世紀末葉から7世紀前半）の「畿内の巨石構造の横穴式石室の技術的影響」、第五段階（7世紀中葉から後葉）の「硬質の石材を複雑精巧に加工」し、「精確な四角形を截り整え、随所に切組積の手法を駆使する」「截石切組積石室」が成立する段階を設定した。このように外部的な影響を重視する一方で、地域的な技術継承についても配慮をみせる。

第一段階の典型例としては、築瀬二子塚古墳（安中市）、王山古墳・正円寺古墳・前二子古墳（前橋市）、第二段階としては高塚古墳（榛東村）、上小埜稻荷山古墳（高崎市）をあげる。第三段階（Ⅲ期）の代表例としては、角閃石安山岩を加工した綿貫観音山古墳（高崎市）、総社二子山古墳後円部石室（前橋市）、凝灰岩を加工した例として諏訪神社古墳（藤岡市）、漆山古墳（高崎市）をあげる。第四段階（Ⅳ期）の代表例としては、八幡観音塚古墳（高崎市）、笹森稻荷山古墳（甘楽町）、総社愛宕山古墳（前橋市）、最後に前方後円墳の築造が停止した第五段階（Ⅴ期）の例として山ノ上古墳（高崎市）、宝塔山古墳（前橋市）、蛇穴山古墳（前橋市）をあげる。

次に右島は、この石室分類に基づき、総社二子山古墳の後円部横穴式石室と綿貫観音山古墳のそれが類似していることをふまえ、後者の石室から大阪府南部の窯跡群を基準とするいわゆる陶邑編年のTK（高蔵）43型式に属する須恵器が出土することと、Hr-FP火山灰の降下後に

この型式の石室を有する古墳が築造されていることを根拠に、第3段階を6世紀後半の築造とした。なお、右島は綿貫観音山古墳の横穴式石室の系譜を、形態の類似から朝鮮半島南東部の伽耶地域にみられる中洞里型石室に求めている（右島 2019）。

小林孝秀は、追葬の増加を契機として羨道の埋葬空間化が進むという森岡秀人の議論（森岡 1983）を前提に、群馬県とその周辺における羨道部区画施設の出現を、綿貫観音山古墳などを例にあげて6世紀後半から7世紀初頭に求めた。さらにその契機として右島の議論を参考に畿内地域からの影響に注意を促しつつも、楣石を使用するなどの構造的差異がある点にもふれる（小林 2005・2014）。

2. 横穴式石室にみる技術的先進性—加工石材の利用—

（1）軟石と硬石

群馬県における導入期の横穴式石室の重要な特徴として、表面を面取りすることによって立方体に加工した石材をその構築材として利用する点があげられる。白石太一郎は、群馬県富岡市御三社古墳などを例にあげて、畿内地域に先行して軟質加工石室が成立したとする理解を示す（白石 2003）。草野潤平も、凝灰岩などの軟石加工と花崗岩などの硬石加工では用具や技術、採石法が異なることを前提として、畿内地域と関東における加工石材利用石室では成立の背景が全く異なるとみる（草野 2016：pp. 9-13）。氏は畿内地域では花崗岩を切石加工した岩屋山式やそれに先行する石舞台式、大阪府河南町シショツカ古墳などにみられる硬質石材加工技術が7世紀初頭前後に導入され、7世紀中葉以降に奈良県香芝市塚山穴古墳や高取町東明神古墳、明日香村高松塚古墳などの凝灰岩切石を用いた軟石利用の横口式石槨が登場するという前後関係を認識した。なお、硬質石材加工は、崇峻元年（588年）に始まる飛鳥寺造営に関わった百済工人の関与を想定した。

一方、軟質石材である凝灰岩を用いた舟形石棺が関東地方でも古墳時代中期に認められる。そして、MT15型式期、6世紀初頭にはこの技術を用いた埋葬施設が群馬県西部に展開する。次にそれらの実例を詳細に検討する。

（2）群馬県における加工石材使用石室の登場

前二子古墳は、群馬県前橋市の大室古墳群に位置する墳長 93.7 m の前方後円墳である。後円部南側に開口する横穴式石室（図 1-1）が 1871（明治 11）年に調査され、多数の副葬品が検出されている。その背景や調査の実態については前原豊の整理に詳しい（前原 2009）。時期は須恵器等から MT15 型式期と判断できる（図 3-7）。横穴式石室は全長 13.9 m、幅 2 m、高さ 2.1 m をはかる両袖式横穴式石室であり、天井と壁材には輝石安山岩、床面と扉石には加

工された凝灰岩を用いる。安山岩は 13 万年前の赤城山崩落時におきた土石ながれによって赤城山南麓に点在する「流れ山」から採集されたとみられる。この石材は葺石の一部にも用いられている。凝灰岩は、古墳の東 8 km に位置するみどり市西鹿田町にある天神山から運び込まれたと考えられている。注目できるのは、床面と扉石、奥壁側の屍床とそれを区切る仕切石は六面すべてを平滑に加工した板石が使用されている点である。仕切石は L 字状に切組された部分も認められる（図 2）。なお、柳沢一男や小林は図 1-1 の石室の系譜を朝鮮半島南部の長鼓峰古墳（全羅南道海南）や松鶴洞古墳 1B 号墳 1 号石室（慶尚南道固城）との類似性を指摘している（柳沢 2001、小林 2008）。

次に群馬県伊勢崎市に所在する恵下古墳の埋葬施設（図 1-3）について検討する（梅澤 1981）。当古墳は 1933（昭和 8）年に「開墾によって発見した。円墳でその直径は 27 m だったという。円筒埴輪列が検出されている。埋葬施設は墳頂から 1.5 ～ 1.7 m に設置された凝灰岩を組み合わせた埋葬施設である。底石には扁平な凝灰岩の内側を掘りくぼめた二石が用いられており、内法長 198 cm、幅 54 cm、深さ 18 cm の空間を形成する。この底石上に 2 から 3 段

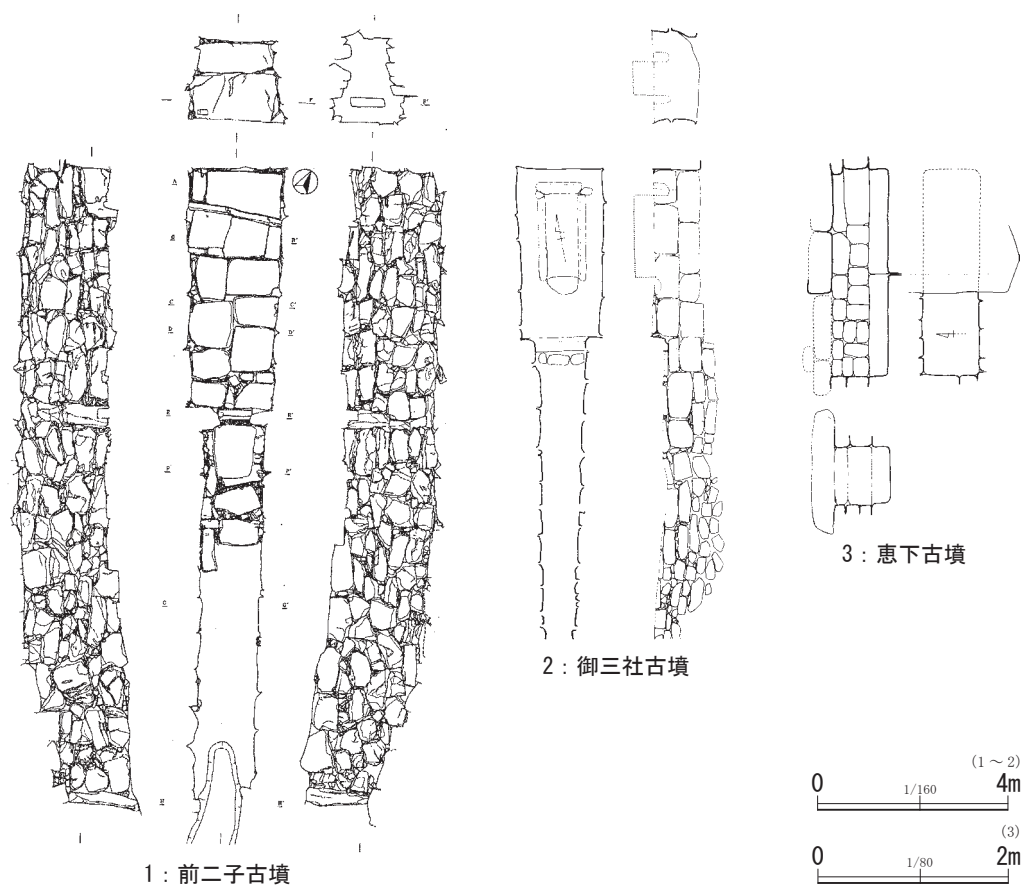


図 1 加工石材を使用した石室



図2 前二子古墳石室床面仕切石の切組構造

の長方形石材がレンガ積みされており、高さ 60cm の空間を作り出している。裏込めには川原石が 20cm 前後の厚さで充填されており、その外側は 20 ～ 30cm 程度の粘土で被覆されていたという。四方の壁石上には長さ 1 m 前後、幅 0.6 m、厚さ 20cm 前後の板石 4 枚が天井石として載せられていた。

石室内からは人骨、玉類、銅釧、銅鏡、直刀、鉄鏃、馬具類、鉄製農具が検出されており、墳丘中腹からは土器類が出土している。土器は須恵器 13 点、土師器 3 点が報告されている（東京国立博物館 1997）。径の小さい坏（図 3-3・4）や短脚の有蓋高坏片などやや古相の須恵器を含むが、おおむね MT15 型式期でとらえられる。

前述した御三社古墳は切石（削石）積石室の初現として重視されてきた。鐙川左岸の下位段丘上に広がる七日市古墳群内に位置する。1959 年に県立高校の校庭拡張工事時に調査されたが、調査時にはすでに墳丘は削平されており、墳丘は 30 m ほど残存していたという。したがって、墳丘形状や規模は不明であるが、大型の前方後円墳であったと推定されている（尾崎 1958）。主体部は加工された凝灰岩を互目積みにした両袖型の横穴式石室である（図 1-2）。石室残存長 10.8 m、玄室長 3.85 m、幅 1.9 m をはかり、天井石は失われていた。埋葬施設は玄室中央には箱式石棺が配され棺縁近くまで小礫が充填されており、棺内は床面より下位に位置する。金銅製三輪玉、水晶製ソロバン玉、管玉、小玉、臼玉のほか、鏃・馬具・直刀の細片、羨道部からは 3 ～ 4 体分の人骨が出土し、内 1 体には須恵器・土師器が伴っていたという。また、墳丘破壊時には円筒埴輪や馬形埴輪などが出土したという。現在、金銅製三輪玉以外の副葬品は所在不明であるが、羨道部出土とされる埴の略図（器高 16.5 cm、体部高 6.5 cm、最大径 10cm、頸部径 4.2 cm、頸部高 8.5 cm）から MT15 から TK10 型式併行期という見方がなされている（田口 1989 : p. 586、入澤 1998 : p. 192）。数値から推定できる形状から TK10 型式併行期であると判断できよう。一方、狭長な羨道と縦長の玄室、玄室床面が羨道床面と段をなし低いことといった特徴は MT15 型式期である築瀬二子山古墳や正円寺古墳、前二子古墳、王山古墳と類似する（田口 1989）。これらをふまえるならば、石室を 6 世紀前半の築造とする判断は妥当であり（草野 2017、若狭 2018 : p. 327）、次にあげる綿貫観音山古墳などの加工石室を利用した先駆例として重要である。なお、田口一郎は 5 世紀の当地域にみられる舟形石棺製作技術が転用されたとみる（田口 1989 : p. 587）。

TK10 型式期に特定できる埋葬施設が群馬県では乏しいために次段階の典型例をあげること

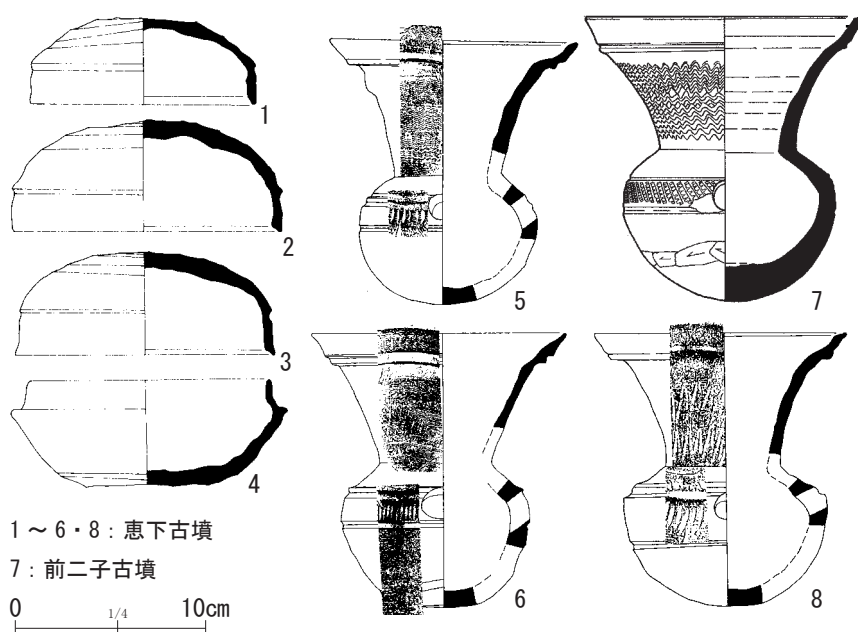


図3 加工石材使用石室から出土した須恵器

は難しいが、続く TK43 型式期に属する横穴式石室としては、高崎市の綿貫観音山古墳や総社市の総社二子山古墳後円部石室、埼玉県行田市鉄砲山古墳をあげることができる。しかし、その様相は大きな変化をむかえる（右島 1994）。また、自然石を用いた横穴式石室の構築も地域的石材に規定されつつ併行する。

3. 横穴式石室にみる先進と技術的未熟

（1）角閃石安山岩加工石室の登場とその限界性

6 世紀後半、TK43 型式期に至ると角閃石安山岩を加工した石室があらたに築造される。角閃石安山岩は、榛名山ニッ岳の噴火（Hr-FP）により旧利根川流域を中心に堆積した石材である（秋池 2000）。採集可能な素材が小ぶりなため、もっぱら数十 cm 四方の石材が側壁に用いられ、天井石には別材が使用される。墳長 97 m の綿貫観音山古墳（図 4-1）や墳長 90 m の総社二子山古墳後円部（図 4-2）など当該期における地域最大の前方後円墳の横穴式石室構築に用いられ、前段階と比べて石室空間が大幅に拡大する。しかし、両石室ともに早い段階で崩壊していた可能性には、あまり注意を払われていない。

綿貫観音山古墳は石室や墳丘が今では精美に復元され、その豊富な副葬品は国宝として指定されている。しかし、1968 年に実施された石室調査時には右側側壁は大きく崩れており、牛伏砂岩製の天井石も崩れた側壁材と床面に落下していた（図 5）。天井石の側壁へのかかりが

少ないという構造的欠陥によると推測されており、築造後の早い時期で崩壊したと考えられている（矢野 1982）。豊富な副葬品の多くは崩落土下より検出されていることから、早い段階での石室崩壊が幸いして副葬品を盗掘から守った可能性がある。

石室長は 12.6 m のうち玄室長 8.2 m をはかる（図 4-1）。玄室奥幅は 3.94 m と畿内地域最大の横穴式石室である奈良県橿原市五条野（見瀬）丸山古墳の玄室に匹敵する（梅澤 1999 : p. 303）。ただし、玄室高は最大で 2.3 m しかなく、畿内地域のそれ（藤ノ木古墳玄室高 4.4 m、牧野古墳玄室高 4.5 m）と比べると半分程度となる。奥壁から 3 m には石室主軸直交方向に間仕切り石が並び、奥側を屍床と区分していたことが読み取れる。人骨は検出されているにもかかわらず石棺や木棺の存在は確認されていない。奥側を区画する施設は先述の前二子古墳（図 1-1、図 2）のほかに、榛東村の高塚古墳、さらには東関東で最も古い横穴式石室である茨城県土浦市の高崎山 2 号墳石室でも認められ（岡林 2020）、これらには和田のいう開かれた棺が採用されていたとみられる。

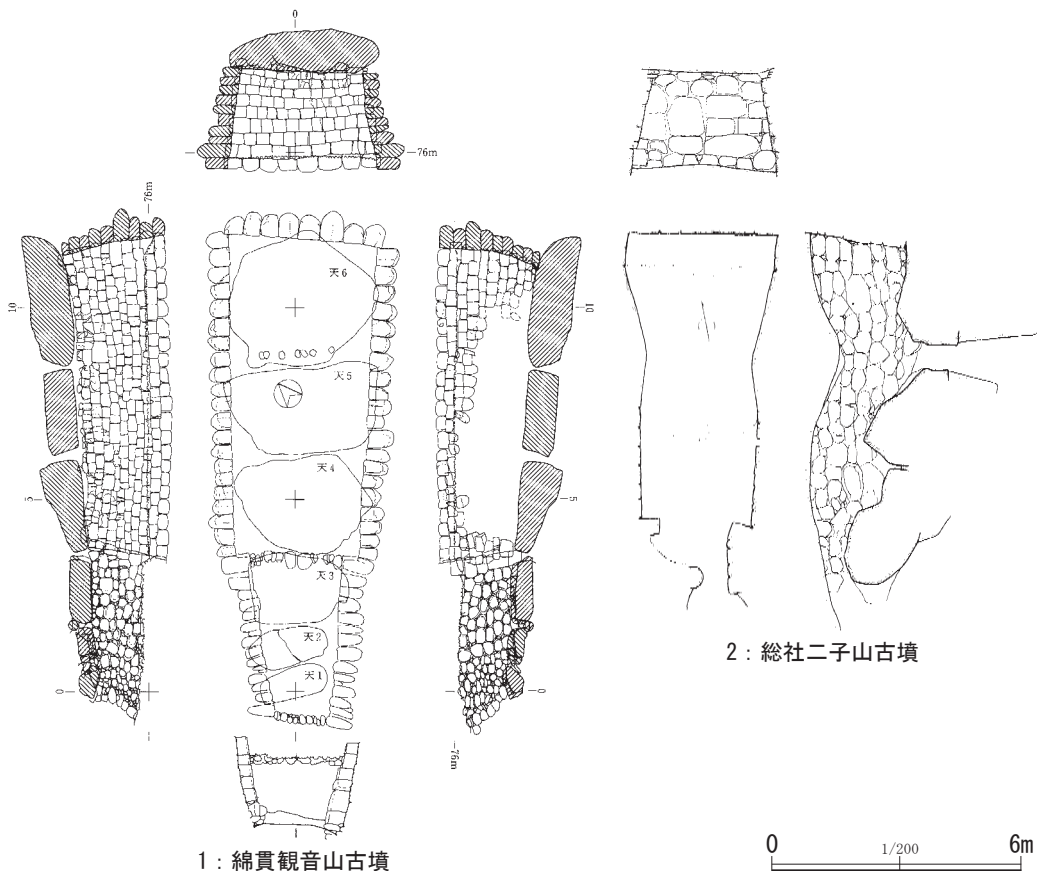


図4 角閃石安山岩加工石材を使用した石室

壁石には六面のうち裏側のみが未加工の20～40cm四方の石材が用いられていた。壁石1ないし2段に対応する裏込めの各単位の上面には、壁石加工時に生じる「削りかす」の薄い層がみられ、現地での石材加工を示す。奥壁と両側壁ともに横目地が中央で下がっており、報告書では施工当初からと判断されえいるが、施工中、あるいは施工後の基礎の不等沈下の影響の可能性もある。なお、須恵器等の出土品からTK43型式併行期であると判断されている。

次に総社二子山古墳後円部石室の状況をみていこう。総社二子山古墳は後円部とともに前方部にも横穴式石室を有する。前方部石室は1819（文政2）年に開口し、頭椎大刀や銅釧、勾玉などの出土が知られているが、後円部石室の開口はこれに先行するとみられる。1927年の史跡指定をへて、1935年には田澤金吾らによって石室測量等が実施された（田澤1937）。図4-2の両袖式石室は実測段階で羨道の大部分は破

壊されていた。玄室の天井石も3石中奥壁側の一石をのぞき、側壁石材の「墜落盗失によって前方に傾倒して幅二尺餘の間隙を生じ、この間隙に上方封土の土壌が落込んで」いたという（図6、田澤1937：p.9）。後世の盗掘による影響は大きいとみられるが、その崩壊の様相は綿貫観音山古墳石室（図5）と似ている。早い段階での崩壊が生じていた可能性がある。奥壁には90cmほどの大型材が使用されるが、側壁には一辺30～50cmの加工石材が用いられる。また、奥壁にみられる2から3石をとおす縦方向の通し目地の存在は、高崎市の金古愛宕山古墳などでもみられる当地域の石積方法の特徴であるが、上方からの加重を分散させるという点で縦目地は不利に働くようにみえる。

（2）先進と未熟

6世紀後半、TK43型式併行期の群馬県西部にみられる加工小型石材をレンガ積みした大型横穴式石室（図4）は、使用する未加工石材を大型化させた畿内地域のそれとは異なる設計思



図5 綿貫観音山古墳の崩壊した石室



図6 総社二子山古墳後円部の崩壊した石室

想に基づく。加工石材を使用することで達成される平滑な壁体は、中国や百済の武寧王陵にみられる塼築墳（山本 2018 : p. 113）への志向性を読み取ることもできる（梅澤 1999 : pp. 303-304）。他の地域にはみられない独自の先進性であると、私も評価したい。

ただし、石材加工技術はすでに述べたように前段階において横穴式石室に導入されていた在来技術と榛名山の噴火がもたらした新たな石材供給の融合である。石室規模に比べると低平な玄室天井高は羨道部のそれと同じで、中国大陆や朝鮮半島中部あるいは九州島にみられるドーム状やかまぼこ状の高い玄室天井とは形態や構造が異なる。これも在来の竪穴石室由来の技術を適用させた横穴式石室構築の限界を示すといえよう。もっとも、巨大化を志向した綿貫観音山古墳石室や総社二子山古墳後円部石室は、早い段階に崩落した可能性が高い。これらの点を重視するならば、切石を壁体に採用するという先進性とは裏腹に当地域における埋葬空間の拡張に関する技術は、未熟であったと判断せざるをえない。つまり、朝鮮半島等からやってきた工人が石室の構築に関与したのではなく、「刺激伝播」として独自に東アジア的な最新の墓制の構築を模索した結果であると推定できよう。このような想定と綿貫観音山古墳の副葬品にみられる豊かな「国際色」は矛盾しない。

この未成熟さは、後出する大型古墳の石室にみられる方針転換と比べるとさらに明瞭となる。次段階の TK209 型式併行期に属する八幡観音塚古墳やさらに後出する可能性もある総社愛宕塚古墳では同時期の畿内型横穴式石室に匹敵する大型石材が用いられ、玄室高が羨道のそれを上回る設計が採用されている（右島 1994）。つまり、6 世紀末において畿内的な技術が導入されることによって、独自の先進性とそれゆえの未熟さは解消されるのである。

おわりに

6 世紀前半における本州島、四国島の広い範囲にみられる横穴式石室の普及は、倭王権との政治的関係で論じられる傾向にある。とくに東日本ではその傾向が強い。しかし、本稿の分析の結果、群馬県の横穴式石室は日本列島のなかで最も早く切石構築を達成しており、その後も東アジア的な志向性、あえていうならば中国文明化とでもいうべき先進性を読み取れるのである。ただし、列島外からの直接的技術導入は認められず、その技術は在来のそれであり、現象としては永島以来の刺激伝播の範疇で理解できる。また、独自であるがゆえの未熟さが綿貫観音山古墳石室の早期の崩落からうかがわれた。

翻って畿内地域はどうであろうか。東国との対比で際立つのは閉じた棺・室を固守する保守性である。また、このように「ガラパゴス化」しつつも、高い労働集約性と技術によって巨大な埋葬施設をつくりあげることも、その特徴である。また、畿内型横穴式石室とされる一群の石室の分布範囲は 150 km 四方と同時期における横穴式石室の分布と比べると狭い。採用される

古墳の規模や量を問わなければ、それは関東平野と同程度の広がりにはすぎない。

東日本や朝鮮半島の横穴式石室を統合的に論じることをとおして、倭王権にとどまらない広域での政治的変動の産物としての横穴式石室研究を今後の課題としたうえで、ひとまず筆をおきたい。

引用・参考文献

- 青木 弘 2024『横穴式石室の築造技術と造墓集団』早稲田大学出版部、東京
- 秋池 武 2000「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義 棒名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石」『群馬県立歴史博物館紀要』21 群馬県立歴史博物館、群馬：pp. 35-60
- 荒井啓汰 2024『埋葬行為と社会的記憶からみた古墳時代の終焉』六一書房、東京
- 入澤雪絵 1998「富岡市・甘楽郡・多野郡」『群馬県内の横穴式石室Ⅰ（西毛編）』群馬県古墳時代研究会資料集第3冊 群馬県古墳時代研究会、群馬：pp. 189-268
- 梅澤重昭 1981「恵下古墳」『群馬県史』資料編3 群馬県、群馬：pp. 573-577
- 梅澤重昭 1999「綿貫観音山古墳の主体部横穴式石室と角閃石安山岩截石削石石室」『綿貫観音山古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告255、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬：pp. 297-313
- 太田宏明 2007「横穴式石室における伝播論～横穴式石室伝播過程比較検討方法論の提唱～」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会、兵庫：pp. 239-260
- 太田宏明 2009「九州系石室の伝播・拡散の過程―畿内型石室との比較検討を通して―」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店、福岡：pp. 101-128
- 岡林孝作 2020「埋葬施設からみた6世紀後半の畿内と東国」『綿貫観音山古墳のすべて』国宝決定記念第101回企画展 群馬県立歴史博物館、群馬：pp. 164-171
- 尾崎喜佐雄 1958「御三社古墳」『日本考古学年報』7（昭和29年度）日本考古学協会、東京：pp. 133-134
- 尾崎喜佐雄 1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館、東京
- 小田富士夫 1980「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4 朝鮮三国と倭国 学生社、東京：pp. 242-295
- 草野潤平 2016『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣、東京
- 小林孝秀 2005「上野における羨道部に区画をもつ横穴式石室の検討」『駒澤考古』第30号駒澤大学考古学研究室、東京：pp. 39-48
- 小林孝秀 2008「関東の横穴式石室と朝鮮半島への視座―長鼓峯類型石室の提起する問題―」『生産の考古学』Ⅱ 同成社、東京：pp. 137-148
- 小林孝秀 2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣、東京
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店、東京
- 白石太一郎 1965「日本における横穴式石室の系譜―横穴式石室の受容に関する一考察―」『先史学研究』5 同志社大学先史学研究会、京都：pp. 61-78

- 白石太一郎 2003「山ノ上古墳と山ノ上碑—古墳の合葬原理をめぐって—」『古墳時代の日本列島』青木書店、東京：pp. 85-113
- 梶山林継 1983「古墳時代後期における地域性について—横穴式石室の玄門部構造—」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上巻 吉川弘文館、東京：pp. 61-125
- 鈴木一有 2001「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム、愛知：pp. 253-262
- 鈴木一有 2007「東海の横穴式石室における分布と伝播」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会、兵庫：pp. 269-280
- 田口一郎 1989「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『東日本における横穴式石室の受容』第2分冊 第10回三県シンポジウム、千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所、群馬：pp. 578-616
- 田澤金吾 1937『上野国総社二子山古墳の調査』日本古文化研究所、東京：pp. 1-22
- 東京国立博物館 1997『須恵器集成Ⅱ（東日本篇）』、東京
- 永島暉臣慎 1979「横穴式石室の出現」『共同研究日本と朝鮮の古代史』三省堂、東京：pp. 66-102
- 土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』学生社 東京
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交流』5 名著出版、大阪：pp. 141-171
- 樋口隆康 1955「九州古墳墓の性格」『史林』第38巻第3号 史学研究会、京都：pp. 1-23
- 前原 豊 2009『東国大豪族の威勢大室古墳群〔群馬〕』シリーズ「遺跡を学ぶ」063 新泉社、東京
- 右島和夫 1994『東国古墳時代の研究』学生社、東京
- 右島和夫 2003「横穴式石室の構築過程を調査する—群馬県富岡市田篠遺跡1号墳—」『古墳構築の復元的研究』雄山閣、東京：pp. 214-254
- 右島和夫 2019「綿貫観音山古墳と朝鮮半島」『国立歴史民俗博物館研究報告』217集、国立歴史民俗博物館、千葉：pp. 319-346
- 右島和夫 2020「古墳時代東国のネットワーク化—古墳時代後期における坂東地域圏の成立過程—」『綿貫観音山古墳のすべて』国宝決定記念第101回企画展 群馬県立歴史博物館、群馬：pp. 148-155
- 森岡秀人 1983「追葬と棺体配置」『関西大学考古学研究室開設30周年論集考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室、大阪：pp. 595-673
- 森下浩行 1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型—」『古代学研究』111、古代学研究会、京都：pp. 1-17
- 柳沢一男 2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』179、朝鮮学会、奈良：pp. 113-155
- 矢野和之 1982「石室崩壊時期の検討」『史跡観音山古墳—保存修理事業報告書—』群馬県教育委員会、群馬：p. 104
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—』、奈良
- 山本孝文 2018『古代韓半島と倭国』中公叢書 中央公論新社、東京

- 山本孝文 2020「韓国における横穴式石室研究の論点と構造・技術系統論」『横穴式石室の研究』同成社、東京：pp. 359-385
- 若狭 徹 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階―上毛野地域を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 国立歴史民俗博物館、千葉：pp. 307-350
- 和田晴吾 2007「東アジアの「開かれた棺」」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』（平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究 研究成果報告書・代表・和田晴吾）、京都：pp. 19-40
- 和田晴吾 2024『古墳と埴輪』岩波新書2020、岩波書店、東京

挿図出典

- 図1 1：前原豊 2014「前二子古墳と後二子古墳の概要」『東アジアから見た前二子古墳記録集・資料集』古代東国文化シンポジウム 群馬県歴史遺産発掘・活用・発信実行委員会、群馬 2：梅澤 1981 3：尾崎 1958
- 図2 著者撮影
- 図3 1～6・8：東京国立博物館 1997 7：前原豊 2014「明治11年調査の石室出土品―陵墓探索調査―」『東アジアから見た前二子古墳記録集・資料集』古代東国文化シンポジウム 群馬県歴史遺産発掘・活用・発信実行委員会、群馬
- 図4 1：群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告255 2：田澤 1937
- 図5 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 図6 田澤 1937
- 以上の文献より一部を改変し、転載